

# 自閉症スペクトラムのある児童へのこだわり行動の 予防・減弱と自立スキルの形成

本人の要求自発機会を活かしたスキルの獲得と維持をめざして

山本 彩織<sup>\*1</sup>・須藤 邦彦

Prevention and reduction of inappropriate behavior and formulation of independence skills in children with autism spectrum upon school attendance :

Striving for acquisition and maintenance of skills drawing on spontaneous requests by students

YAMAMOTO Saori<sup>\*1</sup>, SUTO Kunihiko

(Received December 18, 2020)

キーワード：自閉症スペクトラム、特別支援学校、こだわり行動

## はじめに

同一性への固執は、自閉症スペクトラム障害の診断基準（APA, 2013）の一つであり、日常生活における様々な活動やかかわりを妨げるとされている（本郷・斎藤・奥住, 2016）。なかでも、時間割や日課、あるいは計画の変更といった学校内での予定の変更に抵抗する行動については、自閉症スペクトラム障害児をよろしくない状況へと追い込む最も顕著なリスク要因（佐藤・山田・宮城, 2014）とされている。このような変更  
に抵抗する行動は周囲から「不適切な行動」とみなされ（園山, 2000）、無理に制止しようとする  
と、激しい自傷や他傷行為などに発展する（平澤・馬場, 2011）とされている。これらに対し、  
応用行動分析の視点を  
用いた実践研究では、行動と環境との相互作用を分析し、該当する行動の低減と適切な行動の形成を促す  
試みが行われてきた（例えば、平澤・馬場, 2011；今本・門司, 2014；水谷・水野・小林, 2017）。なか  
でも水谷・水野・小林（2017）は、デイスサービスの送迎バスから降車するような、場面の切り替えに抵抗する  
行動を示す自閉症スペクトラムの青年に支援を行い、当該行動を減弱した。しかし、この先行研究はデイス  
サービスでの実践であり、学校場面での児童を対象にした実践研究は少ない。そこで本研究は、例えば登校直後  
の切り替え場面（昇降口から教室に入室し、荷物の片づけや着替えを行う間まで）の短期間に存在する複数  
の要因の変化（保護者からの指示、教員の立ち位置、その日の日課表に記されている内容など）から生じる  
不適切な行動を予防・減弱することを目的とした。

## 1. 方法

### 1-1 研究参加者

本研究には、対象児と研究実施者4名が参加した。本研究における対象児はA県特別支援学校小学部に在籍する3年生の男児（以下Bさん）である。医療機関にて知的障害を伴う自閉症とADHDの診断を受けていた（5歳児）。また、X-3年に実施した田中ビネー知能検査Vでは、IQ31で、翌年実施された同検査では、多動で検査に興味を示さないことを理由にIQが測定不能とされていた。またX-2年に実施したSM社会生活力検査では、生活年齢が7歳8か月で社会生活年齢は3歳3か月であった。Bさんは登校直後の切り替え場面に何らかの不安を喚起させる変化（例えば、保護者からの口頭指示が普段より多く示される、昇降口に普段と違う教員がいるなど）があると、特定の教員につきまとい特定のやり取りを要求する、あるいは教室

\*1 令和元年度入学 山口大学大学院教育学研究科教職実践高度化専攻特別支援教育コース

に入らずプレイルームに向かい選好する活動（タブレット端末の操作）に従事するといった行動傾向がみられた。また、これらの行動が示された後、強引に教室に入室させようとするると泣き叫んで抵抗する姿が認められた。そしてこれらの行動が頻発することで、登校直後に推奨されている教室内での自立スキル（例えば、制服の着替え）を自発する機会が損なわれていた。以上から、登校直後の不安や教室入室時の泣き叫びのような、情緒的な不安定さを解消したうえで自立スキルのような適切な行動をとることによって社会的に賞賛される機会を増やすことがニーズとして挙げられた。

支援実施者は教職大学院生1名（第1著者）と教育学部4年生1名であった。主に直接Bさんに付き添う支援を前者が担当し、教材作成やデータ分析を後者が担当した。スーパーバイザーは現職経験がある教職大学院生1名と教育学部教員1名（第2著者）であった。特別支援教育に関する実績と経験を生かして本研究を監修し、支援実施者への指導や改善案の提案などの間接的な支援を担当した。

### 1-2 インフォームド・コンセント（説明と同意）

本研究を開始するにあたって研究実施者は、学校管理職と保護者に対して、口頭並びに文書でインフォームド・コンセントを実施した。主に、研究の目的、実施方法、結果の活用方法の3点について説明し承諾を得た。

### 1-3 研究期間と研究場面

本研究は、X年10月～X+1年1月にかけて実施した。特別支援学校小学部において、朝の登校直後のBさんの行動を観察した。場面設定を以下の図1に示した。対象児が教室に入らずに向かうプレイルームは教室の隣にあった。また、Bさんが玄関から入り教室の前まで移動するときのルートが矢印で示した。

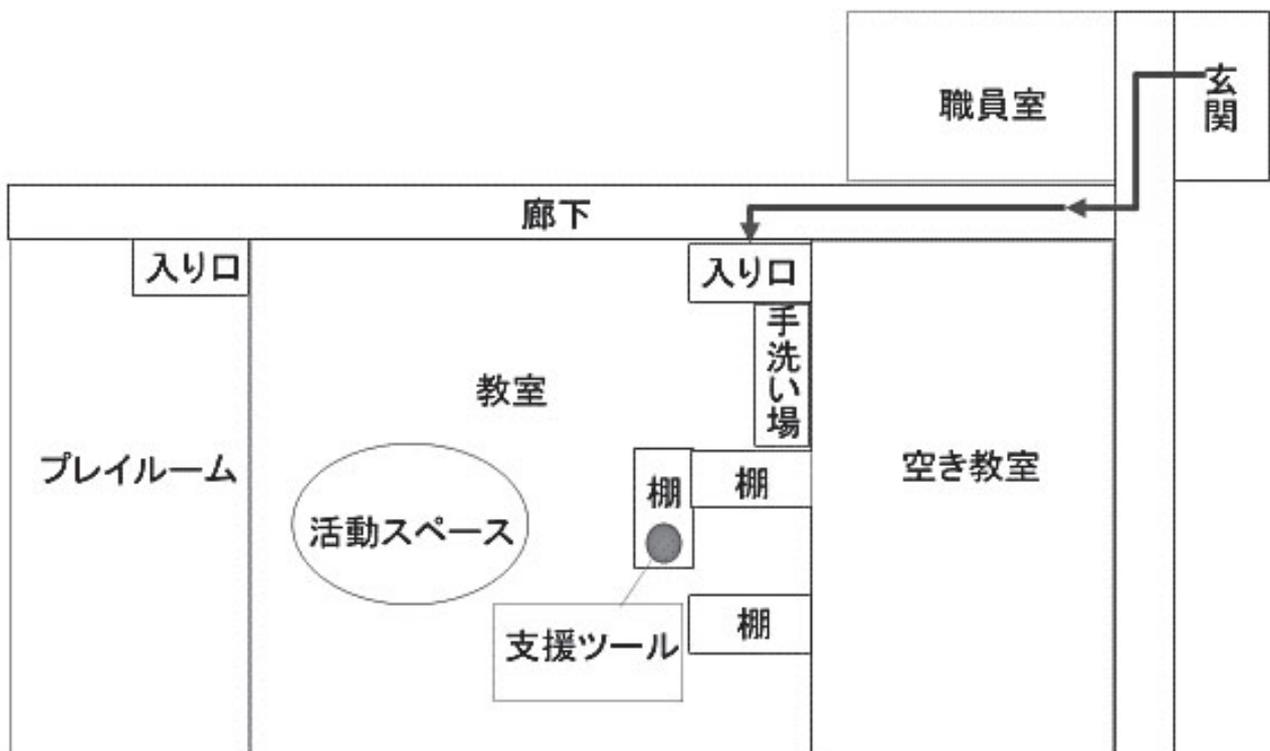


図1 研究場面と玄関から教室までの経路

#### 1-4 標的行動

a. 登校直後の行動傾向として前述した特定教員へのつきまといが生起せず玄関から教室の前まで移動する行動、b. 教室に入る行動、c. 制服を脱ぐ行動、d. ランドセルから体操服の袋を出す行動、e. 体操服を着る行動、f. 脱いだ制服をかごに入れる行動を標的とした。

#### 1-5 支援教材

支援教材として、標的行動の手順を示した2段重ねの絵カード（図2左側）と対象児童が選好する活動が記されたカード（以下、「好きな物カード」）とそのカードを貼る台紙を用いた（図2右側）。2段重ねの絵カードの1段目には、1枚あたり23cm×7.5cmの大きさでそれぞれ標的行動を文字と写真やイラストで表したカードを5枚設置した。1段目のカードはいずれもめくることができるように上部をリング状の金具で留め、横一列に配置した。2段目（上述のカードの上）には、30cm×37.5cmのBさんの好きな車の写真を掲載した。当該絵カードは、標的行動を明確にするとともに、Bさんが1段目のカードをめくる度に2段目の絵柄が示されていくことで1段目のカードをめくる行動を強化する狙いを有していた。「好きな物カード」は、例えば、ipadやミニカーのイラストといった本人が選好する物や、体育館の入り口や校長室の内側の写真など本人が好んで訪れる場所が記されていた。これらのカードはこれまでの学校生活でBさんが使用しており、前述した台紙（27cm×12cm）に自ら選択して貼ったうえで、カードに記されていた活動に従事したり、記されていた場所を訪れたりする姿が確認されていた。

①	②	③	④	⑤	あそぼう
写真	写真	写真	写真	写真	
れんらくちょう	たいそうふくをだす	ふくをぬぐ	たいそうふくをきる	かごに入れる	

図2 絵カード1段目

<div style="border: 1px solid black; padding: 20px; width: fit-content; margin: 0 auto;"> <p>車の写真</p> </div>	あそぼう
--	------

図3 絵カード2段目

## 1-6 手続き

本研究では、ベースラインを3回、介入1を4回、介入2を5回実施した。ベースライン（3回）では介入を行わない状態でBさんの標的行動を測定した。

介入1では、小学部全体での支援や保護者の方への説明および協力要請を行い、Bさんにとって不安を喚起する要素となるものを取り除いた。Bさんは、朝の登校時に玄関で事前に予告していた教員とは別の教員が出迎えたり実習生や研修生などの初対面の教員や面識の浅い教員に出会ったりすると、情緒的に不安定になる傾向があった。そこで、小学部全体での支援として、玄関では予告した通りの教員が出迎えるとともに廊下などで不安になった時にこだわりの対象となる特定の教員と出会わないようにした。また、登校時に保護者からの指示が過剰にあるとBさんが情緒的に不安定になる傾向がより強固になることが推測されたため、保護者に出来るだけ指示を控えるよう依頼した。

介入2では、介入1の手続きを継続するとともに、前述した一連の絵カードを用いて標的行動を強化した。具体的にはまず、教室入室後にBさんからの自発的な要求を待った。そして、「タブレットください」などのようにBさんからの自発的な要求があったときに、支援実施者は交換条件として2段重ねの絵カードを提示して標的行動を言語で指示した。次に、標的行動が1つ生起するたびに、その行動に対応した絵カードをめくり、言語賞賛（「すごいね」や「できたね」など）を提示した。そして全ての標的行動が生起し終わった際に、支援者は言語賞賛と「好きな物カード」を提示し、台紙に張るように求めた。なお、1月22日以降は、Bさんがまだ標的行動を自発していないうちにカードをめくろうとした場合にはカードをめくる行動を制止し支援者が口頭で標的行動を指示した。

## 1-7 結果の分析方法

標的行動のaからfの項目ごとにBさんの反応の結果を記録用紙に記入するとともに、ビデオカメラで撮影を行い記録した。また、全て正反応を示した場合にはその流暢性を計測するために時間を測定した。標的行動bについては、教員がプロンプト（強引な促しではない声かけや指差し）で入室、あるいは前述した対象児の行動傾向が生起しない状態で自発的に入室する場合を正反応とみなした。また、教員が強引に入室させた場合や10分以上入室しなかった場合はその後の教育活動への影響を鑑みてエラーとみなし、必要な支援を実施した。標的行動のcからfについては、教室内であればどの場所で自発しても正反応とした。途中で教室から退室した場合は、退室後1分以内に自発的に教室に戻り標的行動を再開した場合を除いて、その次の標的行動からすべてエラーとみなした。

## 2. 結果

結果を以下の図4に示した。□は正反応を、■はエラーを示している。また、①は教室に入室せず特定の教員にこだわりつきまとう行動②は教室に入らずプレイルームで過ごす行動③は強引に入室させようとすると泣き叫ぶ等の行動を示している。

ベースラインでは標的行動b以外はほとんど生起しなかった。

介入1ではベースラインと比較して、標的行動aが安定して生起した。しかし、教室に入室してからは、途中で退室したり他の物に気を取られて標的行動のうちのいくつかは抜けたりといったエラーが見受けられた。

介入2では、介入1と比較して、標的行動のcからfが安定して生起した。12月11日は途中で退室してしまったが、すぐに教室に戻り標的行動を自発したため正反応として測定した。また、1月22日は、入室直後に自ら標的行動を自発する様子が確認された。なお、全ての標的行動が正反応を示した場合に要した時間の変動については、一定の傾向は認められなかった。

	10/2	10/9	10/16	10/30	11/12	11/19	11/20	12/3	12/10	12/11	1/15	1/22
	ベースライン			介入1				介入2				
a. ①～③の行動が生起せず玄関から教室の前まで移動する	■	■	■									
b. 教室に入る			■						■			
c. 制服を脱ぐ	■		■				■					
d. 体操服を出す	■	■		■								
e. 体操服を着る	■	■		■			■					
f. 制服をかごに入れる	■	■		■		■	■		■			
時間 (100%の場合のみ)					2分 15秒			1分 30秒		4分 45秒	2分 5秒	2分 50秒

図4 標的行動項目と介入結果

### 3. 考察

本研究では、登校直後の短時間に存在する複数の要因の変化が不安を喚起させ、特定の教員へのこだわりや教室に入室することを拒否するといった不適切な行動が生起しやすい児童に対する支援を検討した。その結果、特定の教員へのこだわりや教室へ入室することを拒否する行動が減り、登校直後に求められる衣服の着脱行動が生起するようになった。これらの結果は、まず第1に不安を喚起させる要因となる環境的な変化を可能な限り取り除き、そして次にねらいとする行動の強化価が高まったタイミングで当該行動を自発させ、即時強化することが大切である可能性を示唆した。問題行動を誘発する状況（先行条件）を整備しそれらの出現を予防する方法、その場で望ましい行動が生起しやすくなる状況（先行条件）とそれを即時に強化する支援（後続条件）する方法を組み合わせることは、自閉症スペクトラム障害のこだわり行動（平澤・馬場，2011）や自傷行動（大西・丹治，2019）においてその有効性が示唆されている。本研究も、2段階にわたる介入でこれらのことを実践しており、先行研究の結果を支持したと推測された。

### 引用文献

- 本郷薫・斎藤遼太郎・奥住秀之（2017）：保護者から見た自閉症スペクトラム障害児等のこだわりの捉え方とその対応，東京学芸大学紀要，総合教育科学系，68(2)：163-173.
- 佐藤匡仁・山田幸恵・宮城好郎（2014）：小学校教師の自閉症スペクトラム児対応における「予定変更」リスク評価構造，岩手県立大学社会福祉学部紀要，第16巻（2014. 3），11-21.
- 園山繁樹（2000）：自閉性障害と行動障害．長畑正道他編著「行動障害の理解と援助」，コレール社，72-80.
- 平澤紀子・馬場彩（2011）：自閉症児のこだわり行動への支援に関する研究—問題的な行動要素に関する先行条件の改善から—．岐阜大学教育学部研究報告，人文科学，第59巻，第2号，225-231.
- 今本繁・門司京子（2014）：自閉症児に対する視覚的スケジュールとPECS（絵カード交換式コミュニケーションシステム）を用いたトイレのこだわり行動の減少とトイレ要求行動の形成，自閉症スペクトラム研究，第12巻，特集号2014.

- 水谷愛・水野恵・小林重雄（2017）：自閉症スペクトラム青年男子の送迎車からの降車への抵抗行動の変容，  
自閉症スペクトラム研究，14（2），33-38.
- 大西ゆみこ・丹治敬之（2019）：特別支援学校における自傷行動を示す自閉症スペクトラム障害児への  
Positive Behavior Support（PBS）に基づく実践－自傷行動の低減と朝の会への参加を目指した取り組み  
－，岡山大学教師教育開発センター紀要，第9号，151-165.